

所

信

表

明

平成25年当別町議会9月定例会で
宮司正毅当別町長が所信表明を述べました



この度、町民の皆様から、多大なる信任をいただき、町政運営の重責を担うこととなりました。「当別町の新しいチャレンジ」の牽引役として、身の引き締まる思いでございます。

初登庁の際、この議場において、「できない理由を説明するのではなく、どうしたら可能になるかを考えてほしい」ということを職員に申し上げました。

また、選挙戦では、「視点を変えれば、未来が変わる」を私のキャッチフレーズとして唱えてまいりました。

「新たな視点から、当別町を生き活きとしたまちに成長・発展、そして変身させていきたい」という思いを込め、このような挨拶を申し上げましたが、それから早1か月ほどが過ぎました。

この間、町行政の実情を改めて理解していくほどに、懸案事項と課題の多さに、そして、それを成し遂げなければならないことの難しさに、緊張感が日増しに高まってきています。

過去10数年間、この町は、再構築プランに基づいた財政健全化策を積極的に押し進め、危機的な状況を脱却することができました。

財政の健全化は、まだ、道半ばではありますが、町の現状や社会・経済情勢から、今、積極的な施策展開を図る必要があります。今日、町行政をお預かりした私としては、これまでの成果をフルに活かして、町の活性化に向けて、少しでも歩み出すのが得策であると、意を強くした次第です。

何もせずに、産業が停滞していく局面を迎えるよりも、物事の視点を変え、積極的な財源確保に向けて、守りから攻めに転ずることが大切であり、収入増と雇用創出によって、町民の皆さんの所得増加、町の税収増加、そして、更に新たな雇用創出に結び付けるという好循環を生み出したいのです。

このような好循環に移行できれば、必ず、この町は変わることができます。

経済人として、不可能と言われたことを可能にしてきた実績をこの当別町でも発揮すべく、これからの4年間、全力で町政執行に取り組むことをお約束申し上げます。

基本姿勢

「町の優位性を存分に活かした施策の展開」

当別町は、大消費地「札幌市」に隣接する優位な立地、自然と田園風景を享受できる住環境、基幹産業たる強い農業をベースとした産業化の可能性を有しています。それに加え、昨年電化開業された「JR 学園都市線」、命と産業基盤の水がめ「当別ダム」、そして、「国道 337 号・道央圏連絡道路」等インフラの充実は、町の経済活性化のスピードを更に押し上げる力になります。

特に国道 337 号・道央圏連絡道路はロジスティックネットワーク機能の要衝として、将来、重要な道路になり得るもので、その優位性を存分に活かした施策の展開に挑戦してみたいと思います。

「守りの町政から攻めの町政に転じていく」

我が町の財政は全道市町村との比較においても、まだまだ厳しい状況にあることは認識しています。しかし我が国の経済環境は部分的ではありますが、好転の兆しが感じられるようになってきました。そういう点で今や、経済活性化の施策に向けて、前に一步を踏み出す環境が整いつつあると言えます。

私は町民による起業や外からの企業誘致等により、産業の活性化を図って「町の収入源を増やす施策」に打って出る時期が到来したと考えます。農業の 6 次産業化や再生可能エネルギー産業の育成という中央政府の方針に乗り遅れないためにも、早急に産業振興制度の見直しを行い、攻めの体制づくりに着手したいと考えます。

「視点や物の見方を変える」

「常に変化し続ける社会環境や経済環境に目を向け、これまでの慣例にとらわれることなく、物事の視点を変えてみるという姿勢が大切である。」これは初登庁の際、役場職員に話したことです。

「町民が何を望んでいるか」「その望みを叶えるにはどうすれば良いか」町民と一緒に考えて、工夫してみる。一緒に知恵を出し合う。そんな役場にしていきたいと考えています。私が重視しているのは「発想の転換」と「スピード感」であり、それを役場職員に促しながら課題解決に取り組んでいく所存です。

施策の展開

「産業の活性化」

町の企業や商店が発展し、新しい事業を町民が起こしやすいように、また、企業誘致が可能となるように、「産業振興の制度」を早急に整備し、町の産業育成に取り組みたいと考えます。産業が発展すれば、雇用が増大し、町民の収入が増え、この町での消費力が高まり、結果、町の税収が増えます。資金が町で還流する仕組み、そういう循環を生み出したいのです。

「農産物のブランド化」については、JAとも密接に連携し、農業者集団と多くの企業と接触する機会を設けることについても協議を重ねていく所存です。一気に6次産業化を目指すというよりは、当別町内での2次加工の事業化推進、農業者間の協働・協調体制づくり、3次産業の強化などから始め、当別の農産品ブランドづくりを目指したいと考えます。ブランド化の手法については、当別きっての世界的ブランド「株式会社ロイズコンフェクト」にノウハウを学ぶのも一案と考えます。

「町に人を呼び込む」

道の駅の要素を含む「インフォメーション施設」の建設を実現し、町に来訪者を増やすことを目指してまいります。単なる農産物販売所に留まらず、町内商店が出店可能なテナント施設やレクリエーション施設など、複合施設の集積を目指したいと考えます。それには、民間資本を如何に取り込むことができるかも重要です。また、地域住民を対象とした祭りから、人を呼び込む祭りのイメージで、他の地域にはないこの町特有の祭り・イベントづくりも訪問客を増やす施策と考えます。

「再生可能エネルギーを活用したまちづくり」

わが町に存在する「再生可能エネルギー資源」を評価し直し、水力発電、木質バイオマス、地中熱、太陽光発電・風力発電など再生可能エネルギーの利用・導入の検討に入りたいと考えます。また、雪エネルギー資源を積極的に利活用する先例地の実態や、関係機関からの助言等を参照し、研究したいと考えています。

「少子化対策と教育・福祉」

子育て世代の雇用の場の確保に併せて、この町の教育を充実させ、近隣自治体に比べ、圧倒的な差別化が体感できる教育環境をつくることも必要です。具体的手法としては、小・中一貫学校、中・高一貫学校の考えがありますが、産業活性化、新たな教育環境へのチャレンジ、そして、町の知の資産である北海道医療大学との連携強化などを相乗効果として、少子化対策・教育・福祉施策の展開を図りたいと考えます。

